闇中問答

芥川龍之介

一

或声　お前は俺の思惑とは全然違つた人間だつた。

僕　それは僕の責任ではない。

或声　しかしお前はその誤解にお前自身も協力してゐる。

僕　僕は一度も協力したことはない。

或声　しかしお前は風流を愛した、――或は愛したやうに装つたらう。

僕　僕は風流を愛してゐる。

或声　お前はどちらかを愛してゐる？　風流か？　そ

れとも一人の女か？

僕　僕はどちらも愛してゐる。

或声　（冷笑）それを矛盾（むじゆん）とは思はないと見えるな。

僕　誰が矛盾と思ふものか？　一人の女を愛するものは古瀬戸（こせと）の茶碗を愛さないかも知れない。しかしそれは古瀬戸の茶碗を愛する感覚を持たないからだ。

或声　風流人はどちらかを選ばなければならぬ。

僕　僕は生憎（あいにく）風流人よりもずつと多慾に生まれついてゐる。しかし将来は一人の女よりも古瀬戸の茶碗を選ぶかも知れない。

或声　ではお前は不徹底だ。

僕　若しそれを不徹底と云ふならば、インフルエンザに罹つた後も冷水摩擦をやつてゐるものは誰よりも徹底してゐるだらう。

或声　もう強がるのはやめにしてしまへ。お前は内心は弱つてゐる。しかし当然お前の受ける社会的非難をはね返す為にそんなことを言つてゐるだけだらう。

僕　僕は勿論そのつもりだ。第一考へて見るが善い。はね返さなかつたが最後、押しつぶされてしまふ。

或声　お前は何と云ふ図々しい奴だ。

僕　僕は少しも図々しくはない。僕の心臓は瑣細な事にあつても氷のさはつたやうにひやひやとしてゐる。

或声　お前は多力者のつもりでゐるな？

僕　勿論僕は多力者の一人だ。しかし最大の多力者ではない。若し最大の多力者だつたとすれば、あのゲエテと云ふ男のやうに安んじて偶像になつてゐたであらう。

或声　ゲエテの恋愛は純潔だつた。

僕　それは譃（うそ）だ。文芸史家の譃だ。ゲエテは丁度三十五の年に突然伊太利（イタリイ）へ逃走してゐる。さうだ。逃走と云ふ外はない。あの秘密を知つてゐるものはゲエテ自身を例外にすれば、シユタイン夫人一人だけだらう。

或声　お前の言ふことは自己弁護だ。自己弁護位手易(たやす)いものはない。

僕　自己弁護は容易ではない。若(も)し手易いものとすれば、弁護士と云ふ職業は成り立たない筈(はず)だ。

或声　口巧者(くちがうしや)な横着ものめ！　誰ももうお前を相手にしないぞ。

僕　僕はまだ僕に感激を与へる樹木や水を持つてゐる。それから和漢東西の本を三百冊以上持つてゐる。

或声　しかしお前は永久にお前の読者を失つてしまふぞ。

僕　僕は将来に読者を持つてゐる。

或声　将来の読者はパンをくれるか？

僕　現世の読者さへ碌（ろく）にくれない。僕の最高の原稿料は一枚十円に限つてゐた。

或声　しかしお前は資産を持つてゐたらう？

僕　僕の資産は本所にある猫の額ほどの地面だけだ。僕の月収は最高の時でも三百円を越えたことはない。

或声　しかしお前は家を持つてゐる。それから近代文芸読本の……

僕　あの家の棟木（むなぎ）は僕には重たい。近代文芸読本の印税はいつでもお前に用立ててやる。僕の貰つたのは四五百円だから。

或声　しかしお前はあの読本の編者だ。それだけでもお前は恥ぢなければならぬ。

僕　何を僕に恥ぢろと云ふのだ？

或声　お前は教育家の仲間入りをした。

僕　それは譃だ。教育家こそ僕等の仲間入りをしてゐる。僕はその仕事を取り戻したのだ。

或声　お前はそれでも夏目先生の弟子か？

僕　僕は勿論夏目先生の弟子だ。お前は文墨（ぶんぼく）に親しんだ漱石先生を知つてゐるかも知れない。しかしあの気違ひじみた天才の夏目先生を知らないだらう。

或声　お前には思想と云ふものはない。偶々（たまたま）あるのは

矛盾だらけの思想だ。

僕　それは僕の進歩する証拠だ。阿呆はいつまでも太陽は盥（たらひ）よりも小さいと思つてゐる。

或声　お前の傲慢（がうまん）はお前を殺すぞ。

僕　僕は時々かう思つてゐる。――或は僕は畳の上では往生しない人間かも知れない。

或声　お前は死を恐れないと見えるな？　な？

僕　僕は死ぬことを怖れてゐる。が、死ぬことは困難ではない。僕は二三度頸（くび）をくつたものだ。しかし二十秒ばかり苦しんだ後は或快感さへ感じて来る。僕は死よりも不快なことに会へば、いつでも死ぬの

にためらはないつもりだ。

或声　ではなぜお前は死なないのだ？　お前は誰の目から見ても、法律上の罪人ではないか？

僕　僕はそれも承知してゐる。ヴエルレエンのやうに、ワグナアのやうに、或は又大いなるストリントベリイのやうに。

或声　しかしお前は贖（あがな）はない。

僕　いや、僕は贖つてゐる。苦しみにまさる贖ひはない。

或声　お前は仕かたのない悪人だ。

僕　僕は寧（むし）ろ善男子（ぜんなんし）だ。若（も）し悪人だつたとすれば、僕

のやうに苦しみはしない。のみならず必ず恋愛を利用し、女から金を絞るだらう。

或声　ではお前は阿呆かも知れない。

僕　さうだ。僕は阿呆かも知れない。あの「痴人の懺悔」などと云ふ本は僕に近い阿呆の書いたものだ。

或声　その上お前は世間見ずだ。

僕　世間知りを最上とすれば、実業家は何よりも高等だらう。

或声　お前は恋愛を軽蔑してゐた。しかし今になつて見れば、畢竟（ひつきやう）恋愛至上主義者だつた。

僕　いや、僕は今日でも断じて恋愛至上主義者ではな

い。僕は詩人だ。芸術家だ。
或声　しかしお前は恋愛の為に父母妻子を抛（なげう）つたではないか？
僕　譃をつけ。僕は唯僕自身の為に父母妻子を抛つたのだ。
或声　ではお前はエゴイストだ。
僕　僕は生憎（あいにく）エゴイストではない。しかしエゴイストになりたいのだ。
或声　お前は不幸にも近代のエゴ崇拝にかぶれてゐる。
僕　それでこそ僕は近代人だ。
或声　近代人は古人に若（し）かない。

僕　古人も亦一度は近代人だつたのだ。

或声　お前は妻子を憐まないのか？

僕　誰か憐まずにゐられたものがあるか？　ゴオギヤアンの手紙を読んで見ろ。

或声　お前はお前のしたことをどこまでも是認するつもりだな。

僕　どこまでも是認してゐるとすれば、何もお前と問答などはしない。

或声　ではやはり是認しずにゐるか？

僕　僕は唯あきらめてゐる。

或声　しかしお前の責任はどうする？

僕　四分の一は僕の遺伝、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然、――僕の責任は四分の一だけだ。

或声　お前は何と云ふ下等な奴だ！

僕　誰でも僕位は下等だらう。

或声　ではお前は悪魔主義者だ。

僕　僕は生憎悪魔主義者ではない。殊（こと）に安全地帯の悪魔主義者には常に軽蔑を感じてゐる。

或声　（暫く無言）兎に角お前は苦しんでゐる。それだけは認めてやつても善（い）い。

僕　いや、うつかり買ひ冠（かぶ）るな。僕は或は苦しんでゐることに誇りを持つてゐるかも知れない。のみなら

ず「得れば失ふを惧(おそ)る」は多力者のすることではないだらう。

或声　お前は或は正直者かも知れない。しかし又或は道化者(だうけもの)かも知れない。

僕　僕も亦どちらかと思つてゐる。

或声　お前はいつもお前自身を現実主義者と信じてゐた。

僕　僕はそれほど理想主義者だつたのだ。

或声　お前は或は滅びるかも知れない。

僕　しかし僕を造つたものは第二の僕を造るだらう。

或声　では勝手に苦しむが善(い)い。俺はもうお前に別れ

るばかりだ。

僕　待て。どうかその前に聞かせて呉れ。絶えず僕に問ひかけるお前は、――目に見えないお前は何ものだ？

或声　俺か？　俺は世界の夜明けにヤコブと力を争つた天使だ。

二

或声　お前は感心に勇気を持つてゐる。

僕　いや、僕は勇気を持つてゐない。若し勇気を持つ

てゐるとすれば、僕は獅子の口に飛び込まずに獅子の食ふのを待つてゐるだらう。

或声　しかしお前のしたことは人間らしさを具へてゐる。

僕　最も人間らしいことは同時に又動物らしいことだ。

或声　お前のしたことは悪いことではない。お前は唯現代の社会制度の為に苦しんでゐるのだ。

僕　社会制度は変つたとしても、僕の行為は何人かの人を不幸にするのに極まつてゐる。

或声　しかしお前は自殺しなかつた。兎に角お前は力を持つてゐる。

僕　僕は度たび自殺しようとした。殊に自然らしい死にかたをする為に一日に蠅（はへ）を十匹づつ食つた。蠅を細かにむしつた上、のみこんでしまふのは何でもない。しかし噛みつぶすのはきたない気がした。

或声　その代りお前は偉大になるだらう。

僕　僕は偉大さなどを求めてゐない。欲しいのは唯平和だけだ。ワグネルの手紙を読んで見ろ。愛する妻と二三人の子供と暮らしに困らない金さへあれば、偉大な芸術などは作らずとも満足すると書いてゐる。ワグネルでさへこの通りだ。あの我（が）の強いワグネルでさへ。

或声　お前は兎に角苦しんでゐる。お前は良心のない人間ではない。

僕　僕は良心などを持つてゐない。持つてゐるのは神経ばかりだ。

或声　お前の家庭生活は不幸だつた。

僕　しかし僕の細君はいつも僕に忠実だつた。

或声　お前の悲劇は他の人々よりも逞しい理智を持つてゐることだ。

僕　譃をつけ。僕の喜劇は他の人々よりも乏しい世間智を持つてゐることだ。

或声　しかしお前は正直だ。お前は何ごとも露れな

いうちにお前の愛してゐる女の夫へ一切の事情を打ち明けてしまつた。

僕　それも譃だ。僕は打ち明けずにはゐられない気もちになるまでは打ち明けなかつた。

或声　お前は詩人だ。芸術家だ。お前には何ごとも許されてゐる。

僕　僕は詩人だ。芸術家だ。けれども又社会の一分子だ。僕の十字架を負ふのは不思議ではない。それでもまだ軽過ぎるだらう。

或声　お前はお前のエゴを忘れてゐる。お前の個性を尊重し、俗悪な民衆を軽蔑しろ。

僕　僕はお前に言はれずとも僕の個性を尊重してゐる。しかし民衆を軽蔑しない。僕はいつかかう言つた。――「玉は砕けても、瓦は砕けない。」シエクスピイアや、ゲエテや近松門左衛門はいつか一度は滅びるであらう。しかれ彼等を生んだ胎（たい）は、――大いなる民衆は滅びない。あらゆる芸術は形を変へても、必ずそのうちから生まれるであらう。

或声　お前の書いたものは独創的だ。

僕　いや、決して独創的ではない。第一誰が独創的だつたのだ？　古今の天才の書いたものでもプロトタイプは至る所にある。就中（なかんづく）僕は度たび盗んだ。

或声　しかしお前は教へてもゐる。
僕　僕の教へたのは出来ないことだけだ。僕に出来ることだつたとすれば、教へない前にしてしまつたであらう。
或声　お前は超人だと確信しろ。
僕　いや、僕は超人ではない。僕等は皆超人ではない。超人は唯ツアラトストラだけだ。しかもそのツアラトストラのどう云ふ死を迎へたかはニイチエ自身も知らないのだ。
或声　お前さへ社会を怖れるのか？
僕　誰が社会を怖れなかつたか？

或声　牢獄に三年もゐたワイルドを見ろ。ワイルドは「妄(みだ)りに自殺するのは社会に負けるのだ」と言つてゐる。

僕　ワイルドは牢獄にゐた時に何度も自殺を計つてゐる。しかも自殺しなかつたのは唯その方法のなかつたばかりだ。

或声　お前は善悪を蹂躙(じうりん)してしまへ。

僕　僕は今後もいやが上にも善人にならうと思つてゐる。

或声　お前は余り単純過ぎる。

僕　いや、僕は複雑過ぎるのだ。

或声　しかしお前は安心しろ。お前の読者は絶えないだらう。

僕　それは著作権のなくなつた後だ。

或声　お前は愛の為に苦しんでゐるのだ。

僕　愛の為に？　文学青年じみたお世辞は好（い）い加減にしろ。僕は唯情事に躓（つまづ）いただけだ。

或声　誰も情事には躓き易い。

僕　それは誰も金銭の慾に溺（おぼ）れ易いと云ふことだけだ。

或声　お前は人生の十字架にかかつてゐる。

僕　それは僕の自慢にはならない。情婦殺しや拐帯（かいたい）犯人も人生の十字架にかかつてゐるのだ。

或声　人生はそんなに暗いものではない。

僕　人生は「選ばれたる少数」を除けば、誰にも暗いのはわかつてゐる。しかも又「選ばれたる少数」とは阿呆と悪人との異名なのだ。

或声　では勝手に苦しんでゐろ。お前は俺を知つてゐるか？　折角お前を慰めに来た俺を？

僕　お前は犬だ。昔あのフアウストの部屋へ犬になつてはひつて行つた悪魔だ。

三

或声　お前は何をしてゐるのだ？
僕　僕は唯書いてゐるのだ。
或声　なぜお前は書いてゐるのだ。
僕　唯書かずにはゐられないからだ。
或声　では書け。死ぬまで書け。
僕　勿論、――第一その外に仕かたはない。
或声　お前は存外落ち着いてゐる。
僕　いや、少しも落ち着いてはゐない。若し僕を知ってゐる人々ならば、僕の苦しみを知つてゐるだらう。
或声　お前の微笑はどこへ行つた？
僕　天上の神々へ帰つてしまつた。人生に微笑を送る

為に第一には吊り合ひの取れた性格、第二に金、第三に僕よりも逞しい神経を持つてゐなければならぬ。

或声　しかしお前は気軽になつたらう。

僕　うん、僕は気軽になつた。その代りに裸の肩の上に一生の重荷を背負はなければならぬ。

或声　お前はお前なりに生きる外はない。或は又お前なりに……

僕　さうだ。僕なりに死ぬ外はない。

或声　お前は在来のお前とは違つた、新らしいお前になるだらう。

僕　僕はいつでも僕自身だ。唯皮は変るだらう。蛇の

皮を脱ぎ変へるやうに。

或声　お前は何も彼も承知してゐる。

僕　いや、僕は承知してゐない。僕の意識してゐるのは僕の魂の一部分だけだ。僕の意識してゐない部分は、――僕の魂のアフリカはどこまでも茫々と広がつてゐる。僕はそれを恐れてゐるのだ。光の中には怪物は棲まない。しかし無辺の闇の中には何かがまだ眠つてゐる。

或声　お前も亦俺の子供だつた。

僕　誰だ、僕に接吻したお前は？　いや、僕はお前を知つてゐる。

或声　では俺を誰だと思ふ？

僕　僕の平和を奪つたものだ。僕のエピキユリアニズムを破つたものだ。僕の、——いや、僕ばかりではない。昔支那の聖人の教へた中庸の精神を失はせるものだ。お前の犠牲になつたものは至る所に横はつてゐる。文学史の上にも、新聞記事の上にも。

或声　それをお前は何と呼んでゐる？

僕　僕は——僕は何と呼ぶかは知らない。しかし他人の言葉を借りれば、お前は僕等を超えた力だ。僕等を支配する Daimôn だ。

或声　お前はお前自身を祝福しろ。俺は誰にでも話し

には来ない。

僕　いや、僕は誰よりもお前の来るのを警戒するつもりだ。お前の来る所に平和はない。しかもお前はレントゲンのやうにあらゆるものを滲透して来るのだ。

或声　では今後も油断するな。

僕　勿論今後は油断しない。唯ペンを持つてゐる時には……

或声　ペンを持つてゐる時には来いと云ふのだな。

僕　誰が来いと云ふものか！　僕は群小作家の一人だ。又群小作家の一人になりたいと思つてゐるものだ。平和はその外に得られるものではない。しかしペン

を持つてゐる時にはお前の俘（とりこ）になるかも知れない。

或声　ではいつも気をつけてゐろよ。第一俺はお前の言葉を一々実行に移すかも知れない。ではさやうなら。いつか又お前に会ひに来るから。

僕　（一人になる。）芥川龍之介！　芥川龍之介、お前の根をしつかりとおろせ。お前は風に吹かれてゐる葦（あし）だ。空模様はいつ何時変るかも知れない。唯しつかり踏んばつてゐろ。それはお前自身の為だ。同時に又お前の子供たちの為だ。うぬ惚（ぼ）れるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ。

（昭和二年、遺稿）

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
１９６８（昭和43）年８月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：野口英司
１９９８年３月23日公開
２００４年２月17日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。